

受けたキリスト教信仰を背景として、健康法や代替医療に接近した。新たな健康論は、必ずしもそれらと齟齬を来すものではなかったのである。

プロテスタント信仰は健康論と結びつくことで、非プロテスタント的宗教への批判言説としても働いた。この時代の反カトリック主義の言説の中には、カトリックに特徴的な、跪いての祈りや様々の信心業が、体に負担を強いる不健康なものであるとの議論が見られる。健康という価値は、プロテスタントの宗教と結びつき、異質な宗教、とりわけその実践的側面をよりいっそう異化するとともに、健康のために規律化された生活習慣という、新たな宗教的实践とすら呼びうるものをアメリカ人にもたらしただのである。

### 黒人運動にみる宗教的家族組織の形成

——米国のオリシャ崇拜より——

小池 郁子

本発表の目的は、アメリカ合衆国の黒人運動に携わるアフリカ系アメリカ人(アメリカ黒人)が、宗教的家族組織を形成することに何を求め、その活動によって何を実践しようとしているのかを明らかにすることである。そのうえで、彼らが地域社会や家族をどのように経験し、語り、また、いかに対峙しようとしているのかを考察する。本発表は、アメリカ黒人の抱える社会問題を、彼らに特有の逸脱した家族像に還元する傾向を再考し、さらに、黒人運動によって展開されるアメリカ黒人男性向けの支援活動を、家父長制や伝統的価値観の無批判な復興と

は異なる視点から論じることの布石としたい。

黒人運動の一つ、オリシャ崇拜運動は一九五〇年代後半に米国で組織化された。これは、オリシャと呼ばれる西アフリカ、ヨルバの神々を崇拜する宗教・文化実践を核にした運動である。運動が組織された当初は、「反白人・反キリスト教」主義を標榜していた。しかし、一九八〇年代半ばより、コミュニケーションの問題からその運動理念は時代とともに変容し、コミュニケーションを中心とした一極集中型の運動形態から、米国の各地に点在する成員個人の宗教的家族組織(*iréle*)を軸にしたものへと移行してきている。

米国の地域社会や家族をめぐることは、多くの議論がなされてきた。たとえば、家族論では「母親」「母性」という視点が強調され、女性に注目がおかれてきたこと「杉山二〇〇七」、あるいは、米国の奴隷制という歴史を踏まえれば、「家族」という制度には人種的、階級的差異は必然であるにもかかわらず、少数派にも主流の規範的家族モデルを踏襲することが要求されてきたことの問題などが論じられている「杉山二〇〇七」、アンチオープン二〇〇一、フックス二〇一〇。また、米国の特徴の一つとして、個人と国家のあいだを担う民間部門が強力であり、とりわけコミュニティ(「地域社会」)や家族は、自己統治という側面で重要な役割を担ってきたこと、さらにそこにはキリスト教保守派の影響が色濃く認められることが指摘されている「久保二〇〇七」。

そこで本発表は、オリシャ崇拜運動によって宗教的家族組織が展開される事例の一つとして、米国南部の「男性結社 Low-

country Cultural Vibration Society」を取り上げ、その運営目的、始動段階の準備的活動、企画会議等での成員の語りを分析する。

以上を踏まえて、本発表は次のことを示す。男性結社の準備的活動では、父との関係の希薄さや、男親的存在(年上の男性)が必要という語りが頻繁にみられる。ただし、これを単純に家父長制の復興、再生産を目指す活動として捉えることはやや早急に過ぎるのではないだろうか。男性結社では、「地域社会の父」という概念を考案することで、「父」が不在の家族構成を逸脱することはない。これは別の観点からみれば、「家長制」と揶揄されるアメリカ黒人の家族のあり方を否定しないことにつながりうる。

男性結社の活動が求めているのは、国家権力の下部に位置し、個人を国家へと吸収する中間集団としての地域社会(たとえば、キリスト教保守派の制度)への参加促進や再生ではない。彼らの活動は、主流の地域社会に重なりつつも距離をおくアメリカ黒人の地域社会を築き、同時に、主流の地域社会に異議申し立てをしようとする試みである。

最後に、こうした男性結社の諸活動には、意図する目的を實現できるかどうかという評価とは別に、準備的活動のプロセスそのものに、他者との関係構築(世代間の橋渡し)が埋め込まれている。そのため、男性結社の諸活動は、人と人のつながりを編み出し、共通の知を蓄積し、それによって、地域社会を変化させていくとともに、従来の規範的家族にとらわれない「生」のあり方を生み出す原動力となりうるのではないだろうか。

ブラック・ディアスポラの宗教運動における

### 「黒人」概念の変遷

上岡 励起

本発表の目的は、「ブラック・ディアスポラ」と呼ばれる新世界に離散したアフリカ系の人々が持つ自己イメージの変遷を、黒人宗教運動史を通じて明らかにするものである。中世ヨーロッパは、「野蛮人」で「神を持たない人々」にキリスト教を布教して文明を伝えするという人道主義的な名目のもとに奴隷制度を整えた。新世界の原住民はヨーロッパから持ち込まれた疫病や植民者による大量虐殺によって全滅してしまふ。そして新たにアフリカから代わりの奴隷が輸入されることになったが、この原住民にかつて与えられていた「野蛮人」というイメージはアフリカの黒人にも適用されることになる。フランスの歴史家ガブリエル・アンチオーブは、ヨーロッパではそもそも一七世紀に至ってもなおアフリカの黒人は「一般的に異なった人種に帰属する者」として見做されており、集団的なイメージとして白人よりも劣っている存在とは認識されていなかったと主張している(アンチオーブ、二〇〇一年)。しかし十八世紀に入ると、西洋的でない人間、文化、宗教、言語は「野蛮」あるいは「未開」であるという言説が流布された。このようにして、西洋は人種主義によって黒人を本質的な劣等人種である「ニグロ」として定義して人種差別の無謬性を唱えると同時に、キリスト教を媒体としてアフリカ人の隷属状態と野蛮性を象徴レベルあるいは神話レベルまで引き上げた。そのような状況において黒人キリスト教から生まれたエチオピアニズムは、聖書